

知られざるフランス

大牟田 稔



パリからトゥールーズに向かう鉄道の途中にリモージュという陶器で大変有名な農村地帯の町があります。この

町の近くのある小さな村での出来事をこれからお話したいと思います。

パリから飛行機で約1時間、リモージュ空港に着きます。そこからタクシーで30分余りのところに何の変哲もない人口1,500人の村オラドゥール・シュル・グラヌがあります。近くにもオラドゥールという地名がありますので、それと区別するために「グラヌ川にのぞむ」とついています。広島と対比されて注目されているこの村で、1944年6月10日、オラドゥールの悲劇が起こったのです。その悲劇とは？それは現在どのように示されているのでしょうか。

日本式に言えば昭和19年になりますが、当時のフランスは北側がドイツ占領地、南側は解放区域と2つに分断されていました。リモージュはリムーザン地方の中心地で丁度その境界線上でした。6月と言いますと、第二次世界大戦も最後のあたりで、6月初旬には連合軍がノルマンディ地方に逆上陸して、フランスを占領していたドイツ軍を撃破していくいわゆるノルマンディ上陸作戦が始まった頃です。

先の境界線上にあたるこの地方は大変穏やかで、別段戦争がどこであるのか判らない普段と変わらない農村の日常が続いていたと記録されています。そのオラドゥールに6月10日土曜日の午後、ナチスドイツが侵攻して、オラドゥールの悲劇が始まったのです。

ドイツ兵はオラドゥールの村人を集め、男性と女性・子供に分けて、成年男子は納屋、倉庫、ガレージに、そして約500人の女性・子供を教会に連れて行き閉じ込めます。当時の村長が自分を人質にとってくれと申し出ますが、ドイツ軍は有無を言わせず全員（病人から子供にいたるまで）集めて虐殺しました。その手段は機関銃の乱射におさまらず、その後、その場所と村中の家々（洋服屋を除き）に火を放ちます。

その夜、ドイツ兵は一軒だけ残しておいた洋服屋のワインを飲み大いに騒ぎ、翌日は宝石類を持ち出した後、そこも焼き払ってしまいます。12日の未明に再びやってきたドイツ兵は死体を全部穴に埋めます。それでも女性1名を含むわずか数名ですが生存者がいました。犠牲者数642名。そのうち身許の判明したもの52名。残りりは全く判明しなかったといわれています。

我々広島に住む人間からしますと、広島は数十万の人間が一発の原子爆弾で犠牲となり、しかも放射能の後遺症が残り、まさに世界の広島です。しかしオラドゥールが今なお、我々の記憶にある種の刺激を与えるのは、この村が当時のままそっくり残されているからです。いろいろ聞き、写真を見たりして想像はしていましたが、現実に見て、その範囲の広さとたくさんの家が残されているのに驚き、しかも当時住んでいた人の生活の臭いが伝わってくるような残し方に新たな驚きを感じました。

空襲の後の廃墟は猛烈な臭いがするものですが、48年も経っていますので臭いもまた瓦礫の山の鋭角も風雪で丸みを持ち大変穏やかな風貌になっています。が、電車の架線はそのままですし、15世紀に建てられた教会、この教会は500人の女性・子供を詰め込み殺したところですが、天井はぬけ落ち、上から落ちた鐘が潰れて脇に置かれていました。また窓辺のミシン、パン屋の半ば開いているオープン、交差点の分か



れ道にタイヤのないルノーが一台、そして自転車屋に修理をするためにかけてある自転車が数台という状態で残されていました。また

北側に作られた新しい村に行きましたが、例えばミロールというお店があり、それは虐殺前にもあった店の名前で、多少異なっているのは、悲劇の前をそのまま再現した形で新しい村が作られているように感じました。

何故この村だけがドイツ軍によって虐殺されたのでしょうか。1) 武器を隠し持っていた。

(住民は否定) 2) もう一つのオラドゥールと間違われた。それはその村がレジスタンス活動の中心だった。3) フランス人に対してのみせしめ。などいろいろな説がありますが現在でもどれが本当の理由か判っていません。

フランス人も(特に若者は)余りオラドゥールのことは知りません。広島が世界の広島になっているのとは正反対です。今の広島が核兵器の全廃を強く世界に訴えているのに対していかにもひっそりとしています。動の広島に対して静のオラドゥールです。村にはこれといった説明もなく、点在する家の名前と“SOUVIENS-TOI”(思い出してください)という立札、それもボロボロになり字も薄くなったのが所々にたっています。そして、廃墟の間には“SILENCE”

(沈黙、お静かに)と書いた板がボツと下に置いてあるだけです。教会の壁にも婦人が一人飛び出して助かったと書いてあるだけです。廃墟そのもので悲惨さを表しており、言葉による説明はほとんどありません。それは恐らくフランス政府が今の国際情勢の中でドイツを刺激しないようにと思っただけのような気がしました。またこのオラドゥールの簡素な言葉と広島

の慰霊碑に書かれている碑文「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」を比べた時やはり国の違いが感じられました。

20年来の夢の地を訪れ、新聞記者くさい感想になりますが、我々は広島

の悲劇を訴えていますが、朝鮮半島、中国、フィリピンという所に日本人は案外オラドゥールをたくさん作ったのではないかと、そのことに我々は気付いているのだろうかと考えました。中国のオラドゥールもフィリピンのオラドゥールも消えてしまっていて、48年たった今は立派な姿になっていますが、私の胸が詰まる思いになるのは、相手の顔を見ながら殺しているということです。空襲で顔の見えない相手を殺すのと違い、人間と人間が顔と顔を突き合わせて殺戮を繰り返しました。そういうことを日本もどこかでやってきたのではないか。そのことを「お前達も思い出せよ」と言っているのではないか、ということがオラドゥールを見た時に胸に突き刺さったことです。

広島はこのように立派になり、相変らず核兵器の問題を世界に訴え続けていくでしょう。しかし私は原爆投下と集団虐殺とを考えてみた場合、人間のやることはある意味ではむしろ後者の方が我々に近いのではないか。このオラドゥールを考える時にそういう行為に導くもの、ある種の狂気みたいなものをやはり人間は持っている。それがどういう時に出てくるのか、このことを考えなければならないと感じました。フランス人も余り知らない、また世界でもそれほど有名ではないが、オラドゥールの廃墟を持つ意味は特に歴史に対して健忘症になっていく我々にある意味で大きな刺激を与えてくれるように思えます。

また、私の住んでいる町が広島であり、広島は世界の平和の原点だといわれていますが、平和という問題を考える時にももちろん核兵器の残虐さというのは当然ですが、人間が人間を殺すという野蛮で愚かな行為、これが未だにユーゴあたりや近年ではイラクでも起きていますし、その他、世界の各地で続いています。日本も今アジアとの戦後処理問題で批判され、新しい問

(6 頁下段に続く)

~~~~~  
題も出ています。そうしたことに對してこの廢  
墟は何を物語っているのかを理解することが大  
事です。フランスのファッション・美術館を見  
ることもいいけれども、その裏にあるものをきち  
んと残そうというフランス人の感覚をこのオラ

ドゥールを通して、もっと知っておくのも大切  
なことではないかと思ひます。

参考：杉山 毅『緑の中の廢墟』（溪水社）  
（財）広島平和文化センター理事長：1992年10月  
3日(土)開催）

「広島日仏協会報」 No.120 (1993.3.15)